野間宏における人民戦線運動と《近代主義批判》

―日本とドイツの戦後文学者の視点から―

尾西康充

1　反ファッショ人民戦線運動

京都帝大文学部仏文学科に在学していた野間宏は、今津尋常小学校時代からの友人であった西宮の旋盤工・羽山善治や神戸川崎造船所の切削工（ミーリング）・矢野笹雄たちを、京都帝大の学生活動家に結びつけた。当時、羽山や矢野を含む奥田宗太郎、堀川一知など阪神間の労働者グループは、党派をこえて広範な民主勢力を結集する反戦反ファシズム人民戦線運動の方針下、労働戦線の統一を図ろうとしていた。

反戦反ファシズム人民戦線運動とは、一九三五年七～八月のコミンテルン（共産主義インターナショナル）第七回世界大会で、ゲオルギー・ディミトロフが「ファシズムの攻勢と、ファシズムに反対し労働者階級の統一をめざす闘争における共産主義インタナショナルの任務」に関する報告をおこなったことに由来する。ディミトロフ報告は同年一〇月、神戸の海員組合の活動家によって日本に持ち込まれ、日本共産党およびその影響下にあった日本全国労働組合全国協議会（全協）や、日本農民組合全国会議派（全農全会派）に根強く存在していた非合法主義的偏向に対して是正を迫った。阪神地方では、全協再建の迂回戦術として全評阪神地方協議会の結成、全農全会兵庫県連合会の全農総本部派への復帰、社会大衆党神戸支部への接近などが進められたのであった。

しかしその一方、三・一五事件の被告春日庄次郎が一九三七年一月、非転向のまま刑期一〇年を終えて大阪刑務所から出獄し、尼崎を拠点に活動を再開していた。日本共産党の再建を主張する春日は、同年一二月に日本共産主義団を結成し、機関紙「嵐をついて」「民衆の声」「党生活者」他を発刊して、各地の活動家に配布した。団のメンバー竹中恒三郎は、京大ケルンと呼ばれていた京都帝大の学生グループに連絡をつけることに成功し、小野義彦や永島孝雄、布施杜生たちが非合法活動に加わるようになった。

党再建こそが正しい共産主義活動であると信じていた学生たちの姿は、「暗い絵」（「黄蜂」第一～三号、一九四六年四、八、一〇月）のなかで、木山省吾、永杉英作、羽山純一の三名に描き出されているが、非合法の活動に身を投じた彼らは全員が獄死する運命にあった。「暗い絵」の舞台は日中戦争が勃発する直前の京都の町で、木山、永杉、羽山たちは日中の衝突を日本の支配階級の「最後的危機」ととらえ、「プロレタリア革命への転化の傾向を持つブルジョア民主主義革命」が二年以内に到来するものと確信していた。この判断に拠る限り、合法舞台に立つ人民戦線運動は日和見主義として映じたのである。永杉のアパートの六畳の部屋で、「俺はゆうべ、イリイッチのレネガァ、カウツキイを読んだよ」（イリイッチとはレーニンを指す）と羽山がいうと、永作が「ふん、裏切者カウツキイか？　人民戦線は破れるよ」と厳しい言葉で返し、木山は「俺は人民戦線は好かんよ」と切って捨てる。彼らは学内の運動でも合法主義の学生共済会委員たちのグループとは分裂状態にあったと描かれている。

党再建派の活動家たちに対して、人民戦線運動の側に立っていた西宮の施盤工・羽山善治の胸中を、戦後になって野間はつぎのように説明している。

「日本の左翼運動には日和見主義という言葉をほんとうに正しく使うことができないものをもっていた。それはまるで呪文か何かのように使われて、そのためにまたその言葉の前で多くのひとがたじろいだ。そしてそれによってほんとうの前進に必要な条件を具体的にさぐりあてることさえ不可能になった。[1]」

羽山や矢野たちが党再建派から「日和見主義」というレッテルを貼られることによって運動の正系から外れ、活動家を結集させる力を失ってしまった。果たしてそれは「日和見主義」であったのか――。

ディミトロフはさきの報告のなかで、「ファシスト諸国の共産主義者」は「大衆との結びつきを目的として、ファシスト大衆組織内の選挙制のポストを手に入れるようにつとめなければならない。そのさい、そうしたたぐいの活動は革命的労働者にふさわしくない、沽券にかかわるなどという偏見は、さらりとすてさるべきである」と述べている。[2]そして「新しい酒を入れるために古い皮袋を打ち捨てる」ことを要求したのである。

ファシスト組織のなかに潜入することを是とするという新たな活動方針は、阪神間の労働者グループに大きな影響を与えた。社会大衆党（社大党）および全農の日中戦争勃発後における右施回に直面し、一九三八年二月、彼らは全農兵庫県連を、国家主義的傾向を持つ日本農民連盟の系統下の兵庫県農民連盟へと改組した。さらに三九年七月、国家主義政党である東方会の摂陽支部を結成し、四三年一〇月の東方同志会関係者一斉検挙（いわゆる中野正剛事件）に至るまで右翼団体を装って活動を継続し

ていたのである。

野間自身も一九四〇年夏から四一年春までの間、右翼団体の一つである日本建設協会大阪支部に所属していた。これが真の転向であったのか偽装転向であったのかは、これまで議論の分かれるところであった。野間によれば個人の誤りではなく組織の誤りであったとするのだが[3]、今日から振り返って考えても野間の説明通り、それは当時の活動方針に影響された結果であった。

日本の人民戦線運動と関わった野間の文学を検証するための手がかりとして、つぎにドイツの戦後文学者と人民戦線運動の歴史を紹介してみよう。

2　「デア・ルーフ」

ドイツの戦後文学を牽引した文学者集団「グルッペ四七(Gruppe 47)」は、一九四五年三月に米国ネブラスカ州フォート・カーニー収容所で創刊された「デア・ルーフ(Der Ruf)」に端を発している。非ナチに向けた強制的な再教育が目的なのではなく、捕虜たちが祖国ドイツに戻った後に民主主義国家を自発的に建設するための学習機会を提供するのが米軍当局の狙いであった。アメリカ各地の捕虜収容所には、約三七万人の元ドイツ軍将兵であふれていた。驚くべきことに、収容所では当時、将来復活するであろうはずのゲシュタポによって処刑できるように、反ナチス的信条を持つに至った裏切り者がリストアップされていた。実際、四四年一二月までに収容所内のナチス支持者によって私刑にされたドイツ人捕虜の数は一六七名に上っていたという[4]。

「デア・ルーフ」創刊号と第二号には「アメリカにおけるドイツ人捕虜の新聞」、第三号からは「ドイツ人捕虜のためにドイツ人捕虜による編集」というサブタイトルが付せられた「デア・ルーフ」は、捕虜の自主的な判断によって紙面が編集されていることが強調され、ほぼすべてのドイツ人捕虜が帰国し終えた四六年四月に終刊となる。

同紙の編集に携わったアルフレート・アンデルシュは四五年一二月にミュンヘンに復員した後、米軍情報局の新聞の編集をするかたわら「デア・ルーフ」の復刊を企図した。かつての同紙執筆者に連絡をとって、四六年八月一五日に復刊第一号を発行するに至った。「若い世代の自由紙」というサブタイトルが付せられ、第一面には、両手を挙げて降伏する若いドイツ兵の写真が掲載された。巻頭論文「若いヨーロッパがヨーロッパの顔をつくる(Das junge Europa formt sein Gesicht)」のなかで、アンデルシュはつぎのように宣言している。

> こんにちのヨーロッパ再建の担い手は主として若い名もなき人たちである。かれらは象牙の塔の静寂沈思のなかから出てきたのではない……そもそもかれらには学問をするというひまなどはなかった。かれらはヨーロッパをめぐる

武力戦争のまっただなかから、行動のなかからやってきたのである。したがってかれらの精神は行動の精神である。[5]

この一文には、アンデルシュの世代論――一八歳から三五歳までのドイツ人は、ヒトラー台頭に責任がない点において年上の世代と異なり、戦闘の前線や捕虜生活の体験を持った点において年下の世代と区別される――という考え方が反映されている。事実、アンデルシュが三一歳、ハンス・ヴェルナー・リヒターが三七歳、グスタフ・ルネ・ホッケが三七歳、ヴァルター・コルベンホーフが三七歳、ヴァルター・マンツェンが三七歳、ニコラウス・ゾンバルトが二二歳であったように、「デア・ルーフ」の執筆者は三十代と二十代で占められていた。一九一〇年から二七年までの間に生まれた人びとは、古い世代にみられるような敗戦による罪悪感や共同責任の意識には乏しく、むしろ強制的に戦場に駆り出され、生命の危機にさらされたナチズムの犠牲者であるという世代意識を共有していた。このような姿勢は、暗い谷間をくぐり抜けてきた〝三〇代の知識人〟として、自己のエゴに忠実な個人主義文学の確立を求めた「近代文学」同人の態度に通底するものがある。彼ら七人は敗戦時ほとんどが三十代――山室静の三九歳から小田切秀雄の二九歳までの年齢幅に収まって、本多秋五三七歳、平野謙三七歳、埴谷雄高三五歳、荒正人三二歳、佐々木基一三一歳――であった。

ドイツ文学者の早崎守俊氏によれば、「デア・ルーフ」執筆者と「近代文学」同人の間には、興味深い共通点と相違点がみられるという。[6] アンデルシュは一七歳でドイツ共産党に入党、ナチス制覇の直前までバイエルン共産主義青年グループの組織委員長であった。その後、二度逮捕されて政治犯としてダッハウ強制収容所に送られている。釈放後、ワイマール末期の党の政治姿勢――社会民主主義者を排撃する社会ファシズム論――に絶望して脱党する。一九四〇年に召集され、四四年六月にイタリア戦線で脱走を図って米軍捕虜となった。他方、リヒターも貧しい青年時代を送った後、一九三〇年にドイツ共産党に入党するがトロツキズムのため追放された。三三年にナチスが政権を獲るとすぐにパリに亡命したものの生活にゆきづまり、翌三四年にドイツに帰国して書店を営むようになって、四〇年にゲシュタポに逮捕される。同年に釈放されて兵役に就き、フランスやイタリア戦線を転戦する。四三年に米軍捕虜となった後、両者は米国にあるドイツ人捕虜収容所で出会うことになった。

自分たちは三十代であるという世代論が共通していたうえに、「デア・ルーフ」執筆者には絶望的な戦場体験があった。早坂氏によれば、彼らはこの体験が強い紐帯となって一つの世代意識を形成し、「敗戦とともにデモクラシーの仮面をかぶって動きだした古い世代にあからさまに反撥し、また、占領軍の再教育政策に決然と抗議して、かれらの若いなまの声を、沈黙にうちひしがれた祖国の人びとに訴えようとした」とする。[7]

それに対して、「近代文学」同人には兵役の体験がなかったが、

社会主義陣営の出身者であった「デア・ルーフ」執筆者と同じように、「近代文学」同人たちも、戦前の退潮期のマルクス主義運動に参加し、戦後も社会主義的な立場から積極的に発言をおこなった。早崎氏によれば、「近代文学」同人は「敗戦後すぐ、すでにととのえられた足場の上で、はじめから文学の場で仕事を開始できたという状況下にあった。さらに、「閉ざされた日本」という、世界の片隅での戦後社会内であったために、かれらは、戦後文学を早々に転向文学の延長上におき、政治と文学論、文学の上部構造論、知識人論、組織と個人論など、近代精神の理解に役立つテーマをつぎつぎと設定して、戦後社会のテーマ・セッターとなった」という。[8] ドイツがソ連を含む四カ国軍によって分割占領され、直接統治されたのに対して、日本は政府が残されて間接統治がなされたことも、両国の戦後復興において大きな差となっていた。

「デア・ルーフ」を語る際に忘れてはならないのは、リヒターの「マルセル・カシャン氏への手紙」（「デア・ルーフ」第一三号、一九四七年二月）である。マルセル・カシャンはフランス国会最年長の共産党議員であった。第二次世界大戦の戦後処理に際して、イギリスがドイツに対して産業の解体、ルール地方の分割、とザール地方の割譲を求める方針にカシャンが賛成した。リヒターによれば、そのようなカシャンの態度は、フランスのナショナリズムにもとづいたもので、もしそれらが実施されればドイツのプロレタリアの貧困化、ひいては世界のプロレタリアの貧困化をもたらす危険が生じていたという。

かつてカシャンは、ナチスが政権の座に就いたとき、ゲシュタポによる捜査を逃れてフランスに亡命していたドイツの若い社会主義者たちに、ドイツに帰って地下闘争をおこなうように命令した。そして人民戦線運動の方針がコミンテルンから示されるとナチス突撃隊に加わって革命のための破壊工作を内部から進めることを求めた。

> わたしたちの多くは、あなたの言葉を信じてドイツに帰りました。ナチスの強制収容所が待っていた国に帰っていったのです。そしてたいていのひとは、ドイツに残ってファシズムに反抗して死んだ数十万にものぼる人びとおなじく、殺されてしまったのです。しかし、あなたもその一員である共産党の革命的な戦術は変わりました。若い共産主義者がナチス突撃隊に加わり、ナチス突撃隊とナチスの党とを下部からひきさき、穴をうがち、そして革命のための蜂起の機の熟するときをつくれというのです。若い社会主義者たちの多くが、はかり知れぬ理想主義のもと、この命令に服しました。かれらは、こんにち、ファシストであったという汚名をおわされています。しかも、どの党も彼らを弁護する労をとってくれないではありませんか。[9]

カシャンは、一九三九年八月に独ソ不可侵条約が結ばれると、

ドイツの労働者に向かって、「われわれの敵」であるはずのナチ・ファシストたちと手を組んで西側の資本主義国家の優位を打ち砕くことが急務だと告げ、四〇年六月にパリがナチスによって占領されると、フランスの労働者に向かって、武器を捨てて降伏せよと命じた。リヒターは、戦後になってドイツの戦争責任を追及しはじめたカシャンには、国家社会主義と手を組んだ過去がある以上、他の人間に向かって戦争責任を問う資格がないと痛罵したのである。

このようなリヒターによる公開状は、一九四七年三月にミュンヘンで開かれたドイツ共産党の集会で採りあげられたが、ソビエト占領軍はそれをコミュニズム批判のマニュフェストであると決めつけた。東西対立の影が次第にしのび寄りヨーロッパの平和が疑わしくなる状況下で、一九四六年から四七年にかけての未曾有の寒波による厳しい食糧事情も加わって、リヒターは占領軍への辛辣な批判記事を発表するようになっていた。「自由と検疫所とのあいだに」（「デア・ルーフ」第一〇号、一九四七年一月）には、リヒターは「占領軍は好かれていない。人間の歴史のなかで占領軍が好かれたためしはいちどもなかった」と論じている。[10] ファシズムというウィルスによって汚染されたドイツに一時的に「検疫所」を設定する必要性が認められてはいるものの、リヒターは、ドイツ人を「叩きのめされ、辱められ、贖罪服を着るべく判決を下された国民」として描き、占領政策への抵抗を試みていたのである。[11]

ドイツ国民は共同で戦争責任を負うものではない。ドイツを分割統治している占領軍に対する協力を意識的に拒否し、ドイツ統一を切望する、といった「デア・ルーフ」同人の主張がドイツ・ナショナリズムの復活ではないかと警戒していた米軍情報局は、「デア・ルーフ」の発行部数を第一五号以降、七万部から五万部へと削減させていたが、第一七号に「マルセル・カシャン氏への手紙」が掲載されると、ソビエト占領軍からの働きかけもあって、同紙編集部に対する警告を出した。

このような危機のなか、発行元のニュンフェンブルク出版社は自己検閲をさらに強化することになる。ドイツの場合、米軍による出版物の事前検閲は新聞を対象にしておこなわれ、書籍には一度もなされなかった。「デア・ルーフ」は書籍扱いになっていたので、出版社による自己検閲のみで発行されていた。占領軍支配下での収賄汚職、ソ連兵によるドイツ人女性への暴行などを扱った論説は、編集部によって校正刷りの段階で削除された。教条主義的なコミュニズムが社会主義ヨーロッパの統一を妨げていることを指摘するアンデルシュの「日和見主義の勝利」という論説記事は、「デア・ルーフ」第一七号（一九四七年四月）に掲載が予定されていた。しかし突然アンデルシュとリヒターは第一六号をもって編集の任を解かれてしまう。ドイツ文学研究者の相沢啓一氏によれば、米軍情報局による「事後検閲と出版社への警告、最悪の場合の発行停止や営業免許取消の脅しにより出版物のコントロールをきかせるのがアメリカ占領

軍のやり方であったが、それにはじきに出版社側も慣れ、挑発記事と謝罪によるアメリカ軍との力比べが当時の出版業者の日常風景となっていた」という。[12] そしてアンデルシュとリヒターが解任されたのは、まことしやかに語られてきたような、占領軍からの圧力によるものではなく、「むしろ出版社内のつまらぬ内紛に近いものでしかなかった」――当時、出版許可および検閲を担当していた米軍情報管理局（Information Controle Division）に所属していたドイツ人係官エーリヒ・クビィが同紙編集責任者となるために仕組んだ策略であった――とされる。[13]

3 《近代主義批判》

ドイツの戦後文学者たちは、国内外において社会主義勢力を拡大し、統一ヨーロッパによる経済機構を設立したうえで、ヨーロッパの国家連合組織を結成するという希望を抱いていた。しかし東西対立の間にはさまれた敗戦国の無力感から、現実の政治に絶望して《政治からの逃避》という傾向を次第にみせるようになった。

日本の「近代文学」同人の場合、《政治からの逃避》という消極的なニュアンスではなく、政治に対する《文学の自律》を確立するという目標が掲げられた。戦後の日本では四五年九月一〇日から、連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）配下の民間検閲支隊（Civil Censorship Detachment）によって地方紙も含めた新聞や雑誌などすべての出版物や学術論文、放送、手紙、電信電話、映画などに対する事前検閲がはじめられた。事前検閲から事後検閲に移行するのは四八年七月二五日（全国紙は一五日）、検閲が終了するのが四九年一〇月三一日であった。文学がそこからの自律を求めた〝政治〟とは、アメリカ占領軍による統治方針ではなく、日本共産党の行動綱領を意味し、占領軍による支配に異議を唱えるよりも、日本共産党の権威に抵抗するという性質を持っていた。厳しい言論統制の下であったとはいえ、ドイツと日本とでは、戦後文学に大きな違いがみられるのである。

《文学の自律》の代表的論者である平野謙によれば、政治の特徴は目的のためには手段を選ばないところにあり、そのような政治の優位性を前提に活動した戦前プロレタリア文学運動の偏向と誤謬をまず自己批判するところから戦後の民主主義文学がはじめられるべきである（「ひとつの反措定」、「新生活」第二巻第四号、一九四六年四、五月合併号）。さらに荒正人は、「人民のなかへ（ヴォ・ナロード）」という社会主義のスローガンは、解放されるべき民衆が自己の外部に存在するのではなく自己の内部に存在することを前提に語られなければならないとする。「芸術、文学に関するかぎり、民衆のなかへの道は、自己剔抉、内心への血みどろの決闘であり、すなわち、外部の「民衆」ではない内部の「民衆」へ到達するための、危険と苦難の道なき道にほかならない」（「民衆とはたれか」、「近代文学」第一巻第四号、一九四六年四月）。荒によれば、

戦前のプロレタリア文学運動では、苛酷な弾圧にさらされることによって転向や裏切りなどが頻発し、運動の旗印であったヒューマニズムの仮面がはぎとられてエゴイズムが露呈することになった。真のヒューマニズムは、空疎な理想論をふりかざすのではなく、自分たちの「小市民インテリゲンチャのエゴイズム」を拡充することからはじまる。平野や荒たちの考え方には、現実の社会的諸条件を変革する《外部革命》以前に、近代的自我の確立という《内部革命》を実現させなければならないという判断があったのである。ヘーゲルの主人と奴隷の弁証法にみられるように、解放の対象となる民衆が存在してはじめて解放の主体となる党が存在する。民衆とは、その解放を目標に掲げる《象徴的な他者》によって表象されるというパラドックスを考えれば、民衆が自己の外部にではなく内部に存在すると主張するのは、外在化した党の権威を否定するが、思想としてのコミュニズムは肯定していることを含意している。

荒は「戦後」（「近代文学」第三巻第二号、一九四八年二月）のなかで、「内面的衝動」に従って「傷痕と虚脱からの脱出を模索」しようとする三十代、二十代の若者たちが、「四十代の旧進歩人」――「啓蒙イデオローグ」、その大半は「公式主義者」とされる人びと――によって「反動、反革命、デマゴーグ、その他一切の「外なる権威」を背にしたことばの暴力で威嚇」されていることを指摘した。「主体派」と「公式主義者」との対立という荒の主張の背景には、日本共産党や日本民主主義文化連盟のメンバーが中核になった「新日本文学」作家グループと、「近代文学」作家グループとの間で闘わされた主体性論争、文学者の戦争責任論争、政治と文学論争などの一連の論争が存している。ここでは、これらの論争の延長線上でおこなわれた《近代主義批判》をとりあげたい。

一九四七年一二月の日本共産党第六回大会で、アメリカの占領支配の長期化や軍事基地化の危険に対して民族独立の課題を重視する見地から行動綱領が改定された。さらに翌四八年二月の党中央委員会では、民主主義革命の段階での民主的変革――民族独立と民主主義の確立――を目指す民族民主統一戦線が提唱され、労働組合や農民団体をはじめ多くの市民団体に呼びかけられた。ヴィクター・コシュマン氏によれば、党の文化政策を担当していた蔵原惟人は、連合国軍最高司令官総司令部による「急進的な社会経済改革とその徹底ぶりに大きな信頼を寄せていたため、文化がブルジョア民主主義段階を急速に経過し、社会主義建設への道を積極的に準備しさえする」と考えるようになっていた。その結果、開かれた民主主義を志向する党の方針と、急進化した蔵原の姿勢との間で、「戦前のプロレタリア文学運動での困難な経験から文学にたいする党の支配に疑問を抱いていた作家たちに、ダブルバインドの状況をつくりだした」というのである。[13]

作家の主体の場を自我ではなく労働者大衆におこうとする蔵原の〝客観主義的な文学方法〟に反撥を抱いた「近代文学」作

家グループは、政治に対する文学の自律を唱えて個人主義文学の確立を訴えた。ところが、それは民主民族戦線に抵触するものだとして「新日本文学」作家グループが彼らに批判を加えはじめた。宮本顕治、菊池章一、岩上順一、甘粕石介、今野武雄、野坂参三、伊藤律、姉歯三郎、岡本正、古在由重が出席した座談会「近代主義をめぐって」（「思想と科学」第二号、一九四八年七月）や甘粕石介「近代主義の主体性論」（「前衛」第三〇号、一九四八年八月）、蔵原惟人、勝本清一郎、中島健蔵、松本正雄、川口浩が出席した座談会「文化運動と民主民族戦線」（「文化革命」第二巻第一一号、一九四八年九月）、伊豆公夫「近代精神と近代主義――とくに日本の思想文化の場合」（伊豆公夫編『近代主義批判』、一九四九年三月、同友社）、除村吉太郎「近代主義文学の特徴と方法」（同右書）などが相次いで発表された。

これらのなかの一つ、座談会「文化運動と民主民族戦線」のなかで、転向を体験した「小市民的インテリゲンチャ」が「前衛も後衛もひつくるめた、新しい、広い意味での文化運動に従わない」現象が生じていると蔵原惟人が指摘したことについて、勝本清一郎はつぎのように語っている。

> 弾圧の嵐をくぐつて純潔に生きるためには、労働者とちがつて小ブルジョアにとつては自分の精神の内面の独立性にたよるほかに道がなかつた。いかにファッショの嵐が吹き荒れても、精神の内面的自由だけは奪いとられることがなかつた。警官のまえで転向したといつても、心の中ではかならずしも転向したわけではない。こういう精神の自由性だけに頼つた生き方にもいろ〳〵問題があつたが、それはしばらく措くとして、こうして生き抜いてきた人たちのなかには、いくら強権的なものでおさえられても、自分の内心だけは守りうるという一種の自信ができている。これが戦後になつて時には逆の作用をおよぼす。民主主義的な勢力が逆に強権的なものとして映つてくるんだ。かりに共産党の世の中になつても、おれは自由を守りうる。こういう態度が揺曳している。[15]

さらに勝本は、「戦争中は腹の中で妥協しないでファッショとたたかつたが、今は逆に自分自身の精神的自由を民主主義的政治勢力から擁護する。社会党の天下がこようが、共産党の天下がこようが、平気なだけの肚ができている。こゝが小ブルジョア的な非政治的な文学の立脚地なのだ」と、「近代文学」に拠る作家たちの胸中を説明してみせる。勝本は、ロシアの暴力革命のコースには「小ブルジョア文学」の意義が認められる余地はなかったが、西欧諸国や日本の平和革命のコースには「小ブルジョア文学のための社会基盤があると云わざるを得ないのではないか」という状況判断をおこなっていた。

その一方、政治と結びつくことで文学は圧殺される。人間と文学の自主性のためには《政治の優位性》は否定されなければ

ならない、という平野や荒の主張に対して、宮本顕治は「今日は、人民大衆が大衆運動を展開し民主戦線に結集することが必要な時期」なのだから、「「個人」を社会的階級的実践の中へ統一すること」によってこそ「個人の主観の正しい内容も形成」される。「階級を構成する個人」は「理論と実践の統一と社会的変革への参加と新しいモラルの確立」を通してのみ実現されるのだと反論した[16]。客観的な運動プロセスとして展開する社会発展の法則性を認識し、その実現のための政治的実践――階級闘争の渦中に飛び込む――に参加するによって革命的主体が形成されるというのである。

この《近代主義批判》では、野間宏も批判の対象にされている。野間自身が告白しているように、一九四七年一月、代々木の日本共産党本部で開かれていた火曜会（文化活動家会議）に呼び出され、野間の「肉体は濡れて」（「文化展望」第二巻第七号、一九四七年七月）のなかに近代主義的傾向――「近代文学」は「小ブルジョアの運動であり、芸術主義的な民衆とはなれた内容のない個人主義思想による文学運動」である[17]――がみられると攻撃された。とくに野間には、「自我意識の固執の面とセックスの意識の追求の面」があると激しい非難が加えられていた[18]。その場には、徳田球一や宮本顕治、西沢隆二、中野重治、窪川鶴次郎たちがいたとされる。なお野間は四六年末には日本共産党に入党しており、荒は四六年五月半ばに入党していた。

「肉体は濡れて」に加えて「二つの肉体」（「近代文学」第一巻第一二号、一九四六年一二月）、「顔の中の赤い月」（「綜合文化」第一巻第二号、一九四七年八月）には、「近代主義的エゴイズム、実存主義」と「小ブルジョア・インテリゲンチャの退嬰的自己保存意識の面」とが結びついた「反政治主義、個人主義や、恋愛至上主義」といった「近代文学」の特徴がみられるとされたのである[19]。

その一方、野間の作品を肯定的に評価していた荒は「戦後」のなかで、つぎのように論及している。ニヒリズムとペシミズム、エゴイズムで構成された「暗い三角形」の「重心に位置する自我に拠る発想法を文学的な意味でのエゴイズムと規定」するならば、野間は「戦後世代の傷痕と虚脱のコムプレックスと正面切って取り組んでいるといって過言ではない」。荒は、野間の「顔の中の赤い月」をとりあげて、主人公北山年男が戦場で戦友を見殺しにした記憶から逃れられないことに、「たれがそのエゴイズムを非難することができるであろうか」とする。野間は生命の危機に瀕した極限の状況下でエゴイズムを確認し、そこから自己の文学を出発させようとしていたのである。

だが荒によれば、それは戦場だけのことではなかったという。荒は戦争末期、小田切秀雄と佐々木基一との〝世田谷トリオ〟に、岩上順一が加わった文学研究会を定期的に開いていた。一九四四年四月〝世田谷トリオ〟が検挙されてしまうのだが、彼らの活動が発覚したのは、前年四三年六月に検挙された岩上の供述が原因であった[20]。

荒はつぎのようなエピソードを「仮定法」を使って紹介して

いる。検挙されたマルクス主義研究会のメンバーのうちの一人が「病気かなんかの理由」で早く釈放してもらおうと考えて、自分たちの集会がマルクス主義と関わる研究会であったことを自供すれば、留置場に残された残りのメンバーはみな自分を守るために、必死でそれを否認するしかない状況におちいってしまう。

荒によれば、友人を裏切った「その男が戦後口先だけで戦時中の「負い目」などと甘ったれた口をききながら、それがどんなものであるかを決算報告もしないで、逆に自分が売った友の、このような体験からの出発をエゴイストよばわりすることがもしあったとしたら、そのエゴイストが狂暴になり執拗になってゆくことは当然ではないだろうか」という。荒がこのエピソードを「仮定法」で語らざるを得なかったのは、「狂暴になり執拗になることを自制せんがための手段」であったからだとされるのだが、このような厳しい言辞が向かう先は、岩上であったと考えられている。岩上は《近代主義批判》のなかで、「近代文学」同人が「戦時中プチブル・インテリゲンチャとしてとにかく最大の抵抗をしたけれどもそれが充分抵抗しきれなくて非常につらい屈従生活をしなければならなかつた」ので、「唯自分達のエゴイズムを守つていくほかに行き方がなかつた」と、荒たちの「エゴイズム」をあげつらっていた。[21] おのれの過去の行動を忘れてしまったかのような岩上の態度に、荒の怒りの感情は高潮に達したのであった。

しかし荒が本当に語りたかったのは、「こういった孤独の抵抗のなかで、わたくし自身がもうひとつのエゴイズムを発見せねばならなかったという地獄」であった。「もうひとつのエゴイズム」とは「密室のなかで正坐に耐えぬほどの飢えにわたくしは他人の飯を奪い、また空爆のもとでは一番安全な場所で、一番多くの毛布をかぶっていた」ことであった。真のヒューマニズムは、絶望的な情況におかれた個人が自己の内部に潜んでいる「エゴイズムの裸形」に向きあうことからはじまるというのである。

4「罪悪感コンプレックス」

荒によって「戦後現実の未耕地にもっともふかく鋤を入れることができるのではあるまいか」と評価された野間は、南方戦線フィリピンで従軍した体験を持っていた。[22] 野間は戦後になってから、大卒者であったものの幹部候補生を志願せず一兵卒として入営したことや、戦争が終われば軍隊内の暴力を克明に書き表すと上官に向かって主張していたことなど、「戦争にたいするはげしい憎悪」を抱いていたことを明かしている。[23] 野間によれば、戦場で「弾薬はこび」に従事する一方、戦争反対の意識を堅持して「私自身だけを正しい状態においていた」。極言するならば「自分の潔白さだけをまもりぬこうと全力をつくした」という。しかし、「いかに自分が正しく潔白に生きること

ができようとも国民の多くが、苦しみもだえ、動揺しつづけ、さらにまた、正しい道をみつけることができないで長い間さまよっているとき、そのような一人だけの正しさは、何になろうか」と懐疑していたと告白する。[24] 周囲の状況がどうであれ、自分だけが正しいと意識することは、それもまたエゴイズムの一つでしかないというのである。

戦後、平和と民主主義の運動に積極的にかかわった野間ではあったが、自分の戦争体験から、一人ひとりの人間が孤立した生き方にならないように連帯する重要性を痛感していた。イルメラ・日地谷＝キルシュネライト氏によれば、日本の戦争小説の多くは「自伝的アプローチと基本的に感傷的なムード」に貫かれた「私小説」の特徴を持っていた。「戦争記録として集められた普通の市民の個人的な体験記」もまた「個人的な苦しみの瞬間の純粋に個人的な叙述」となって「歴史的次元は締め出されている」という。[25] 野間はエゴイズムを、戦場における兵士の自己保存の行動と、私小説の伝統的なテーマである《性》の欲望とから描き出そうとした。いずれもエゴイズムという個人の罪を問う内容で、アジア諸国に対する侵略戦争をはじめた日本社会の罪を追及するものにはなっていない。やがて「真空地帯」（一九五二年二月、河出書房書下ろし長篇）によって天皇制軍隊の暴力を暴き出すことに成功した――ただし集団の内部に向けての暴力であって外部に振るわれた暴力は描かれていない――のであるが、戦後まもない作品では、あくまでも個人と個人の関係性にとどまっていた。ドイツにおいてもユダヤ人へのショアーは、一九六一年にイスラエルでアドルフ・アイヒマン裁判がおこなわれることによって、その罪の重さに圧倒され、一九六三年から六五年にかけてドイツ人がみずからの戦争犯罪を裁いたフランクフルト・アウシュビッツ裁判を通じて、集団的な罪の自覚を深化させた。

テオドール・W・アドルノは一九五九年一一月の講演会で「国家社会主義（ナチズム）は生きながらえています」と語った。アドルノによれば、ドイツ国家の集団的な罪に対して「罪悪感コンプレックス」を抱いている者――「罪の感情を斥け、発散させ、きわめて愚かな仕方で合理化することで歪曲している人たち」――がドイツ人のなかに多数にみられる。[26] アウシュヴィッツの罪がドレスデン空襲によって帳消しになったとか、ガス室送りになったユダヤ人はたかだか五〇〇万人であって六〇〇万人ではないとか、筋の通らない議論が臆面もなくなされていたのである。「ヒトラーの悪行に責任があるのは、ヒトラーの政権掌握を黙認した者たちであり、ヒトラーに向かって歓呼の声を上げた者たちではない」という馬鹿げた言動は「実のところ、心理面で克服されていないものの印、つまり心の傷の印」なのだという。[27]

このようなドイツの戦後を考えると、党の権威からの自律を訴えて、戦前のプロレタリア文学者を批判した「近代文学」同人は、みずからの転向体験をみつめなおすことから戦後再出発

したことの意義は認めるが、彼らもまた自己の「罪悪感コンプレックス」に影響されて、総力をあげて撃つべき対象を取り違えていたといえるのではないか。真の攻撃目標は、過去の罪を隠して再び筆を執ろうとしていた者たちではなく、彼らに対して転向と戦争協力を強いた者たちであったはずであるし、検閲による言論統制をおこなっていた占領軍であったはずである。

注　本稿の執筆に際しては、アーネスティン・シュラント／J・トーマス・ライマー編『文学にみる二つの戦後　日本とドイツ』（大社淑子他訳、一九九五年八月、朝日新聞社）に所収されたペーター・デメッツ「『叫び』が生まれる―同時代人の追憶」、マルレーネ・J・マヨ「日本人再教育計画―検閲と文学」、J・ヴィクター・コシュマン「『近代文学』と日本共産党―文学論争の時代」を参照にした。

（1）野間宏「孤立の抵抗」（『野間宏全集』第二一巻、一九七〇年五月、筑摩書房、四三頁）

（2）ディミトロフ『反ファシズム統一戦線』（坂井信義、村田陽一訳、一九五五年九月、国民文庫、大月書店、六九頁）

（3）野間の転向問題は、拙稿「野間宏「暗い絵」と《第三の途》―戦中日記にみる無意識の罪責感」（「三重大学日本語学文学」第三〇号、二〇一九年六月）で論じた。

（4）相沢啓一「二つの『ルーフ』をめぐって―アルフレート・アンデルシュに於ける政治と文学（一）」（「詩・言語」第二二号、一九八四年七月、一一頁）

（5）早崎守俊『グルッペ四十七史―ドイツ戦後文学史にかえて』（一九八九年一二月、二九頁）

（6）早崎守俊『負の文学―ドイツ戦後文学の系譜』（一九七二年八月、思潮社、四九頁）

（7）同右、四一頁。

（8）同右、四九頁。

（9）同右、四三～四四頁。

（10）前掲（5）、三二頁。

（11）前掲（4）、二五頁。

（12）前掲（4）、二七頁。

（13）前掲（4）、二六頁。

（14）ヴィクター・コシュマン『戦後日本の民主主義革命と主体性』（二〇一一年四月、平凡社、七三頁）

（15）座談会「文化運動と民主民族戦線」（「文化革命」第二巻第一一号、一九四八年九月、三一～三二頁。

（16）宮本顕治「文化革命と文化活動」（「前衛」第二一号、一九四七年一一月、『宮本顕治文芸評論選集』第二巻、一九六六年一〇月、新日本出版社、七一頁）

（17）野間宏「近代主義批判以降」（「前衛」第一二六号、一九五七年三月、『野間宏全集』第一六巻、一九七〇年一一月、六三一頁）

（18）小田切秀雄『私の見た昭和の思想と文学の五十年』上（一九八八年三月、集英社、三五二頁）

（19）宮本顕治「統一戦線とインテリゲンチャ」（「前衛」第三九号、一九四九年七月、『宮本顕治文芸評論選集』第二巻、一四二頁）

（20）本多秋五「解説」（『荒正人著作集』第一巻、一九八三年一二月、三五〇～三五一頁）

（21）座談会「近代主義をめぐって」（「思想と科学」第二号、一九四八年七月、一一七頁）

（22）荒正人「戦後」（『荒正人全集』第一巻、三〇四頁）

（23）前掲（1）、二七頁。

（24）前掲（1）、三一～三二頁。

(25) イルメラ・日地谷＝キルシュネライト「日本の知的風土45～85―戦後からみる」(『文学にみる二つの戦後　日本とドイツ』、一九九五年八月、朝日新聞社、一四一頁)

(26) テオドール・W・アドルノ「過去の総括とは何を意味するのか」(原千史他訳『自律への教育』、二〇一一年一二月、中央公論新社、一二頁)

(27) 同右、一三頁

［おにし　やすみつ　本学教員］